

平成24年度第1回しあわせ倍増プラン2009市民評価委員会

会 議 記 録

【平成24年5月22日(火)】

日時 平成24年5月22日(火) 19:30～21:25

場所 浦和コミュニティセンター第13集会室

議事次第

- 1 開会
- 2 委嘱状の交付
- 3 市長あいさつ
- 4 委員、事務局紹介
- 5 議題
 - (1) 委員長の選出
 - (2) 委員長職務代理者の選出
 - (3) 評価方法及び今後の進め方について
- 6 その他
- 7 閉会

出席者

- 1 委員(13名)(敬称略)

委員長	廣瀬克哉
委員長職務代理	長野 基
委員	伊藤巖、河西純恵、木島好嗣、栗原俊明、須藤秀人、 高木健次、高島清、福崎智恵、星野真一、町田直典、 三浦匡史

- 2 事務局(7名)

森田 治(政策局長)
井上靖朗(政策局総合政策監兼政策局都市経営戦略室長)
中井達雄(政策局都市経営戦略室副理事)
西尾真治(行財政改革推進本部副理事兼政策局都市経営戦略室副理事)
中野英明(政策局都市経営戦略室参事)
大西起由(政策局都市経営戦略室副参事)
鳥海雅彦(政策局都市経営戦略室主幹)

1 開会

司会

本日は、お忙しいところお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

開会前に申し上げます。

本市では、市民の方々に対しまして、透明かつ公正な会議運営を図り、開かれた市政を推進するため、このような会議を原則として公開することといたしております。

お手元にお配りいたしました資料1「しあわせ倍増プラン2009市民評価委員会設置要綱」第5条第4項にもその旨を規定しております。また、傍聴に関します手続等につきましては、資料2といたしまして「しあわせ倍増プラン2009市民評価委員会傍聴要領」を定めております。

本日は、現時点では傍聴者の申し出者はいらっしゃらないことをご報告申し上げます。

それでは、これより平成24年度第1回「しあわせ倍増プラン2009」市民評価委員会を開催させていただきます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます都市経営戦略室の鳥海と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、本委員会は、会議記録作成のため写真撮影と録音をさせていただきますこと、あらかじめご了承願います。よろしくお願いいたします。

2 委嘱状の交付

司会

それでは、初めに、各委員の皆様にも市長から委嘱状を交付いたします。

お手元にお配りいたしました名簿の順にお名前をお呼びいたしますので、恐縮でございますが、呼ばれました方はご起立をお願いいたしますと存じます。

なお、本日は橋本克己様からご欠席の連絡をちょうだいしておりますので、後ほど事務局よりお渡しさせていただきます。

それでは、お名前をお呼びいたします。

伊藤巖様。

清水市長

委嘱状、伊藤巖様。平成24年度「しあわせ倍増プラン2009」市民評価委員会委員を委嘱します。平成24年5月22日、さいたま市長、清水勇人。よろしくお願いいたします。

河西純恵様、木島好嗣様、栗原俊明様、須藤秀人様、高木健次様、高島清様、長野基様、廣瀬克哉様、福崎智恵様、星野真一様、町田直典様、三浦匡史様

3 あいさつ

司会

それでは、ここで清水市長よりごあいさつを申し上げます。よろしく申し上げます。

清水市長

皆さん、こんばんは。さいたま市長の清水勇人でございます。

本日は、「しあわせ倍増プラン2009」市民評価委員会の第1回委員会にご出席を賜りまして誠にありがとうございます。また、このたびは、一昨年、昨年に続きまして委員をお引き受けいただきます10名の皆さん、そして新たに委員として加わっていただきます4名の皆さまがご参加され、14名の皆様方でこの市民評価委員会をやっていただくことになりました。今日も7時半を回ったところから会議をしていただくということで、仕事で大変お疲れの中、また、大変お忙しい中をご出席をいただきましたこと、心から感謝申し上げます。

昨年は、私のマニフェストをベースに策定した「しあわせ倍増プラン2009」の、まさに中間報告ともいべき評価を皆さまからいただいたところであります。その中では、単に数値目標だけを考えるのではなく、しっかりと市民の生活にとってプラスになっているのかどうか、質という意味でもしっかり取り組んでいただきたいというコメントもいただきました。また、多くの視点を皆様からお教をいただきました。

そういったことを踏まえまして、平成24年度予算に当たりましては、例えば、民間の建築物の耐震化に当たっての制度改正を少し行いまして、より有効に活用していただけるように取り組んだり、また、これまで太陽光発電、あるいはLED化について数値目標をもとに取り組んでおりましたけれども、そもそもこの太陽光発電、あるいはLED化によってどんなことを目指すのかということも、私たちの政策としてきちんとまとめておこうということで、自然・再生エネルギー、あるいは分散型のエネルギーというようなことなども踏まえた、市としてのエネルギー政策というものをしっかりと作っていこうという予算も盛り込んでおります。

そういう意味では、皆様からいただいたさまざまなご指摘を受けながら、私たちとしては、このしあわせ倍増プランというマニフェスト、あるいはマニフェストに掲げていなくても市民の幸せのためのさまざまな施策を、しっかりと執り行っていきたいと考えておりますので、今年度につきましても、皆さんからさまざまな専門的な視点で、あるいはさまざまなご経験の中から、いろんな視点で忌憚のない意見交換をしていただければありがたいと思っております。

また、一方で、私たちさいたま市が推進をしている施策が、まだまだ市民の皆様のところには届いていないというようなお声も市民の皆様からいただいているのもまた事実であります。私たちとしても、メディア関係への対応なども含めて、いろんな形で取り組んでおりまして、今年は出前講座を増やして、市民の皆様には職員が直接説明をしていくというようなことしておりますし、また、ツイッターやフェイスブックといったことなども取り入れながら、いろん

な形で情報発信をし、また、市民の皆様にご理解をいただこうということも進めていくつもりでございますけれども、それでもまだまだ十分なものではないと考えております。

ぜひ皆様方におかれましても、所属をされているさまざまな団体の中で、また、お知り合いや、あるいは関係者の方々にも、ぜひ皆さんの口から、さいたま市として今こんなことに取り組んでいるんだということをお伝え願えれば、大変ありがたいと思っております。

今年度の市民評価委員会につきましても、私どもも大変期待をしております。ぜひ忌憚のない意見交換の中で、私どもにいろんな点からご助言やご提言をいただければありがたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

4か月間という、短いとも長いとも言える期間、大変濃密な委員会になると思ひます。ぜひともご協力をお願ひをして私のごあいさつにかえさせていただきます。お世話になります。

司会

ありがとうございます。大変申し訳ございませんが、ここで市長は所用のため退席をさせていただきますので、ご了承願ひます。

清水市長

皆さん、どうぞよろしくお願ひいたします。

4 委員、事務局紹介

司会

それでは、これより会議に入ります。

昨年からの引き続きご就任いただきました委員さんもいらっしゃいますが、今年度第1回目の委員会でございますので、改めまして、委員の皆様、そして事務局職員の紹介を行いたいと存じます。

それでは、まず、委員の皆様からお名前と一言ずつ自己紹介をお願ひしたいと存じます。

恐れ入りますが、名簿の順に伊藤様からお願ひいたします。よろしくお願ひします。

伊藤委員

ただいま紹介いただきました自治会連合会の会長の伊藤です。よろしくお願ひします。私は、このしあわせ倍増プランが始まって以来ずっと継続してあります。今、市長が言ったように、いろいろな問題等もあつたりしてありますので、これからどういうふうになつていくかなということも考えております。よろしくお願ひします。

河西委員

岩槻区から参りました河西純恵と申します。皆さん2回目、3回目の方が多いようですが、今回初めて参加させていただきます。今日来るに当たつて資料をできる限り目を通してきたら、岩槻区なので7年ほど前に新しくさいたま市

に入ったのですが、あっ、いいところに住むようになったのだなってとても思っています。考えることはたくさんあるし、感じることもたくさんあるのですが、委員として何がどういうふう提案できるか、評価がお役に立てるかはわからないのですが、精いっぱい考えて取り組んでいこうと思います。どうぞ導きも含めてよろしく願いいたします。

木島委員

木島好嗣と申します。昨年度から参加させていただいております。今、大宮に住んでおまして、勤め先が南青山、港区のほうになります。サラリーマンという立場でこの委員会に参加させていただいております。昨年もできる限りのことはしてきたつもりなのですが、去年やっているということもありまして、その経験があります。それを生かしてですね、より気を引き締めて、より多くの貢献がさいたま市にできればと考えておりますので、ぜひ今年もよろしく願いいたします。

栗原委員

栗原俊明と申します。東口の駅前、大宮銀座商店街から参りました。特に何か専門知識を持っているわけではございませんが、地元という目線から、何かさいたま市に貢献ができればなと思っております。よろしく願いいたします。

須藤委員

須藤秀人と申します。私も今回初めて委員に任命されました。さいたまに住んで約20年になります。民間企業で40年弱勤めた経験、多少なりともマネジメントに携わった経験がございますので、そういった経験をもとにですね、このさいたま市が、さらに活力ある、そして魅力ある市になるように、微力ながら今までの知見を生かしていけたらなと考える次第でございます。よろしく願いいたします。

高木委員

埼玉大学理工学研究科の高木健次と申します。大学では太陽電池の研究をしておまして、環境にも興味があります。学生の視点に立って、少しでもお役に立てることがあれば幸いです。いろいろ勉強させていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

高島委員

皆さん、こんばんは。市内の国公立小・中学校167校から構成されておりますさいたま市PTA協議会副会長を務めております高島でございます。昨年度から引き続き、当委員会に参加させていただきます。保護者の目からいろいろなこととお話しできたらと思っておりますので、皆さんよろしくお願い致します。

長野委員

長野でございます。スタートして3年度目の、幸い初年度から参加させていただいております。現在、勤め先は首都大学東京と申しまして、八王子のほうにございます。大変申し訳ないのですが、勤務先が八王子なので、そこが終わってから来る関係で、今年度に関しましては大幅に遅れて参加することが何回か発生してしまうのではないかと考えておりますが、できる限り皆様の足を引

っ張らないように頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

廣瀬委員

法政大学の廣瀬と申します。私も初年度からということで、今年が3年度目ということになりますが、最初の年は、プランそのものができ上がって、残り数か月準備をした年の評価からこの委員会は始まりました。昨年、ある意味で言うと初めてフルに1年間を取り組んだことの評価をして、それで先を見通してみると、また、今年の評価はほぼ4年間のゴールが見えてきたところでの評価をしなくてはいけないのかなというようなことで、これまでの歩みを含めて考えながら取り組んでまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

福崎委員

こんばんは。北区に住んでおります福崎智恵と申します。私は、現在、法政大学大学院修士課程2年で学んでいます。勉強している分野が政策評価なので、自分が勉強している分野の知識も生かしながら、市民の目でこういったたくさんの資料を眺めたときに何が気になるのか、また、一市民に何が考えられるのかということも積極的に発言し、皆さんと交流していければいいと思っております。よろしくお願いいたします。

星野委員

皆さん、改めましてこんばんは。さいたま中央青年会議所の副理事長を務めております星野真一と申します。私は、埼玉中央青年会議所の代表としてこちらのほうに出席させていただいております。埼玉中央青年会議所は、20歳から40歳までの今約130名で、日夜働きながら、まちづくりを目指して、このさいたま市、また近隣地区で活動のほうをさせていただいております。我々、子育て世代が多いものですから、子育て世代の親としての目線からご意見等をさせていただければというふうに思います。何分新任なもので、皆様のご協力をいただきまして、しっかりと役を務めていきたいと思っておりますので、改めましてよろしくお願いいたします。以上でございます。

町田委員

皆さん、こんばんは。今年で3年目になります。3年目と言いましても、去年の1年間は全く参加できなくて、あげくの果てに最後の報告会まで欠席してしまうという始末でして、非常に事務局の方々、本当に期待に沿えなくて申し訳ありませんでした。今年1年間は、また心を新たにしまして、余裕もありまして、余裕というのは自分の中に余裕が出てきたのですけれども、参加できることになりました。

ちょっと長くなりますけれども、自分がこれを志望した動機というのは、OECD34カ国の幸せ実感度という調査をやる中で、日本でいう子どもたちが自分の幸せ度というのがOECDの加盟国34カ国の中で低いんですね。本当に下から数えたほうが早い。何でそうなのっていうものをずっと持っていて、それで、市長の絆・しあわせ・充実というところで、ああ、これはぴったりだなと。何でそうなったのかなという理由を探る上でも、自分も勉強しなが

らやっていきたいなというふうに思っています。それが動機でした。

いろいろと子ども関係のPTA関係、高島さんたちと一緒にですね、私もPTA会長を昨年までやらせていただいて、いろいろと地域の子どもと一緒にやってきました。そのような中で、昨年1年間来れなかった理由が、不登校の子どもたちとの付き合い方というところで、夜とか、学校とか、けんかもあり、いろいろとやる中で昨年はちょっとこちらのほうには出れなかったのです。その中でいろいろ気づくことというのが出てきて、土曜チャレンジスクールというのも今年実行委員をやらせていただいて、評価委員会の中にもありますけれども、そういった中で何が問題なのかというところも、おぼろげながら自分の中で見えてきた部分もあります。そういったところを少しずつ皆様に、また飲み会の席でもお話しするところがあればいいなというふうに思いますので、いろいろとよろしく願います。

三浦委員

皆様、こんばんは。私、名簿の最後のさいたまNPOセンターという団体の理事で委員をさせていただいて、3年目に入りました。三浦匡史と申します。

さいたまNPOセンターというNPO法人は、この建物の一つ下のフロアの9階の市民活動サポートセンターの指定管理を2期目、今務めておりまして、私もオープンの2007年から昨年の3月までは下で副センター長という職についておりました。今はその管理運営の実務、現場からは引いて、本業は都市計画やまちづくりなどのコンサルティングですとか、あとは市民参加のまちづくりのコーディネーターが専門で、どちらかというともちづくり実務者です。さいたま市の市政と関わりのあるまちづくりの現場にもいくつか、仕事であったり市民活動、非営利活動であったり、いろいろな立場で関わっておりまして、政策提言など常々しておりますので、このような市民評価委員会の委員ということで意見を言わせていただいたり、皆さんの意見を伺ったりというのは、私にとってもとても貴重な機会になっております。今年もよろしく願います。

司会

どうもありがとうございました。続きまして、事務局の紹介をさせていただきますと存じます。

森田政策局長

森田でございます。よろしくお願いいいたします。

井上総合政策監

井上でございます。よろしくお願いいいたします。

中井副理事

中井でございます。よろしくお願いいいたします。

西尾副理事

西尾でございます。よろしくお願いいいたします。

中野参事

中野でございます。よろしくお願いいいたします。

大西副参事

大西でございます。よろしくお願いいたします。

5 議 題

(1) 委員長の選出

司会

それでは、次第に入ります。次第の5、議題に移りたいと存じます。

まず、(1)委員長の選出につきましては、お手元にお配りいたしました資料1「委員会設置要綱」に規定されているとおりでございますが、事務局からの提案といたしましては、初年度よりこの委員会の委員長をお務めいただきました廣瀬克哉様に、引き続き今年も委員長をお願いしたいと存じますが、皆様、いかがでございますでしょうか。

(「異議なし」の声、拍手あり)

司会

ただいま、異議なしというご発言と拍手をもって、委員長選出のご了承をいただきました。

それでは、廣瀬克哉様に委員長をお願いしたいと存じます。

廣瀬様は委員長席にお着きいただきまして、委員長就任のごあいさつをちょうだいしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

廣瀬委員長

ただいま皆様のご推挙によりまして、互選によりまして今年度も委員長を務めさせていただくことになりました廣瀬でございます。

先ほども自己紹介的な場所ではないような発言をいたしました。今年がある意味では実質的に、要はマニフェストのサイクルの中での評価とすれば、今年度の評価というのがある意味で総決算に近い面を有しているのではないかと感じております。

実施後、既に3年度が済み、最終年度目が今もう始まっているところですが、ある程度その今年度の進み具合も、それがどこまでたどり着けそうかというようなことも意識をしながら、市民にとってこのプランがどんな成果を出しているだろうかということについて、市民の視点から、いわばその総合評価をしていくような年になるのではないかと感じております。

それぞれの皆さんの背景でありますとか、あるいは公募に応募されたご動機でありますとか、そういうことも改めて先ほどの自己紹介の中で伺いましたけれども、そういうそれぞれの視点を生かしながら、総合力として、いい評価ができていけば幸いだと思っております。そのために、委員長というのはある意味議事の整理役であり、取りまとめ役という役目だと思っておりますけれども、そのためには皆さんの活発なご議論とそれぞれの評価の視点を生かしたご発

言が不可欠でございますので、皆さんの協力を得まして、いい評価を展開できればと思っております。

どうぞご協力をよろしくお願いいたします。

司会

ありがとうございました。

では、これからの議事進行につきましては委員長をお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

(2) 委員長職務代理者の選出

廣瀬委員長

それでは、委員長に就するという事になりましたので、僭越ですが、役目柄、議事進行を執り行っていきたいと思います。

では、議事は議題の(2)に進みますが、委員長職務代理の選出となっております。

これについては要綱等の制度もございますので、それについて簡単に事務局から説明をお願いいたします。

司会

お手元の資料の1、委員会設置要綱をご覧ください。

設置要綱の規定におきまして、委員長の職務を代理する者は、委員長の指名をということになっております。委員長からご指名をお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

廣瀬委員長

それでは、この設置要綱の規定に基づいて、委員長に事故あるとき、または委員長が欠けたときに、あらかじめ指名する委員にその職務を代理していただくということですが、今年のこの評価委員会の職務代理をお務めいただいた長野基委員にお願いをしたいと思っております。いかがでしょうか。

(「異議なし」の声、拍手あり)

廣瀬委員長

では、長野委員に委員長職務代理をお願いいたします。

では、席を移っていただきまして、長野職務代理からも一言ごあいさつをいただければと思います。

長野委員長職務代理

改めまして、長野でございます。今年度も引き続き職務代理ということで、この委員会の運営のほうのお手伝いできれば幸いです。

先ほど申しましたように、私ちょっと職場が遠いので、場合によってはその場にいないことになってしまうかもしれません。その場合は本当に申し訳あり

ませんが、できる限りそういうことがないように努め、また、一昨年、昨年の反省としましては、この委員会はとても宿題が多くてですね、宿題の締め切りが厳しいんですね。すごい量のものを読み、すごい量のものを書かなきゃいけないという、それがあるので、個人の目標としては遅刻はしないということにしたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

廣瀬委員長

よろしく願いします。

(3) 評価方法及び今後の進め方について

廣瀬委員長

それでは、議題(3)に移りたいと思います。

評価方法及び今後の進め方についてということになりますが、さまざまな資料が本日配付もされておりますので、事務局から、まずは資料の確認、その上で評価方法及び今後の進め方についてのたたき台についての説明をお願いいたします。

事務局職員

それでは、中野のほうからご説明申し上げます。

まず、資料の確認ですけれども、右肩に基本的には資料番号を振ってございまして、次第の次に資料一覧をつけてございます。基本的には資料1から資料7-5までが基礎資料としてお配りしてございます。そのほかに、席上配付資料ということで「評価方法及び今後の進め方」について(たたき台)というようなものがございます。議題(3)につきましてもこれを中心にご説明を申し上げます。それから、資料につきましても細かく確認をしませんが、この資料一覧でご確認のほどよろしく願いいたします。

それでは、早速ですが、(3)の評価方法及び今後の進め方についてにつきましてご説明申し上げます。大変資料が多い中で、恐縮でございますけれども、説明に当たりましては資料を少し行き来するようになりますので、よろしく願いいたします。

それでは、まず、次第と一緒にとじ込んだ資料の多分一番下になるかと思いますが、資料の4をお願いいたします。

まず、評価委員会の全体像を少しごらんいただきたいと思います。

こちらに日程表をつけてございますけれども、評価委員会につきましては、本日時点の計画ですと、今日を含めて、全てで7回を予定してございまして、最後に9月22日に市民評価報告会というところを予定してございます。途中、8月、9月には予備日というところを設けてございますけれども、これにつきましては進捗状況等に応じまして適宜開催をさせていただくことにしております。

それから、評価する事業でございますけれども、早速、次回第2回から第6

回までの間で、全ての事業について評価をしていただくこととなります。1回当たりの事業数は大体20から30程度で分けさせていただいておりました、次回6月1日につきましては、分野とすると子ども、高齢者、この辺をお願いするということでございます。事業数につきましては、第6回の下に合計がございませけれども、123事業を今年度は評価をいただくということで、123事業が対象事業になってございます。

なお、昨年も実施いたしましたけれども、この対象事業のうちヒアリングをですね、所管のほうから出ていただいて、内容を聞いた上で評価をお願いするというものでございますけれども、今年度につきましては、現時点で中段にございますように24事業をヒアリング対象として、今のところ事務局としては予定をしております。これにつきましては、委員の皆様のご指摘やらご指示等によりまして追加とか削除とか、その辺は対応させていただきます。

それでは資料を戻っていただきまして、席上配付資料に移りたいと思います。今申し上げましたように、評価委員会の基本的な考え方でございますが、まず平成23年度の実績評価というものを行っていただくことが基本でございます。また、先ほど来お話もございましたけれども、今年度が倍増プランの計画期間の最終年度ということもございまして、評価の方法を一部変更させていただきたいと考えております。

その内容でございますが、昨年の評価委員会からの指摘事項等も含めましてですね、4点ほど変更をお願いしたいと考えております。

まず、1番でございますけれども、平成24年度、今年度になりますけれども、この事業の目標修正と、当初目標を既に達してしまった事業についての評価の内容でございます。

まず、4年間で達成すべき目標を当初掲げているわけですがけれども、その後の社会情勢の変化ですとか、あるいはこの3年間の取組状況、こういったものから、明らかに当初目標が達成できないものですとか、いろいろな事業が出てまいります。これらの事業につきましては、一部、平成24年度の当初目標、下方修正をかけていきたいというものがございます。

これにつきましては、恐縮ですが、資料は飛びますけれども、資料7-4でございます。大きなA3判のとじ込みの後ろから3枚目になると思います。こちらの資料7-4に目標修正事業一覧ということが掲げてございまして、ここに載せてある9つの事業につきましては、当初の目標を修正させていただきたいということで整理をしております。

なお、この9つの事業につきましては、事務局といたしましては、全てヒアリングをしていただいた上で評価をさせていただきたいというふうに考えている事業でございます。

それから、次の、目標達成済みの事業でございますけれども、これは今のA3の次の資料7-5になりますけれども、これは2枚つづりになっておりますが、達成済事業一覧ということで、この2枚の合計15事業につきましては、全て22年度までに達成済みということになっておりますので、今回の皆様方

の外部評価からは対象外というふうに考えてございます。

次に、席上配付資料に戻っていただきまして、2つ目の変更点でございますが、のところに書いてあるように、事業ナンバー「56 1 人材育成支援」、それから、「56 2 創業環境支援」という2つの事業があったわけですが、この2本の事業につきましては、累積創業件数という同一の成果指標を使用しているというようなことがございまして、この2つの事業については評価シートを一本化させていただきました。したがって、従来、総事業数が139事業あったわけですが、138事業が総事業数というふうに変更になっております。なおかつ、今申し上げたように達成済みの15事業を差し引きいたしますと、皆様方の評価をいただく123事業という数になります。

次に、の評価シートの改善という点がございまして、これにつきましては次の2枚目を見ていただきたいと思います。今年度につきましては計画期間の最終年度ということで、評価シートにつきましては23年度の実績だけでなく24年度の事業の目標も記載をし、なおかつそれを踏まえ4年間のトータルとしての達成見込みというものを明記させていただいております。

また資料は飛びまして、申しわけございません、資料の6、分厚い個票のほうをご確認いただきたいと思います。しあわせ倍増プラン2009個票と書いてございます。

本日、皆様方にお渡しして、この少し厚目の個票につきましては、次回6月1日の第2回の評価委員会で評価をいただく分の個票を配付してございます。全部で27事業分でございます。

表紙をめくっていただきまして、目次がありますけれども、6月1日に出していただく事業内容がすべて書いてあるわけですが、特にですね、濃いハッチの部分、達成済と記載した項目があるかと思っておりますけれども、これは先ほど申し上げましたように評価の対象にはしておりませんので、個票もこの中には入ってございません。それとあと、一番右のところに黒丸が3つ打ってございますけれども、今のところ事務局としては、この黒丸の3つをヒアリング対象事業として予定しているという意味でございます。

次をめくっていただきまして、資料の2ページ、3ページをごらんいただきたいと思います。

この個票につきましては、左右、2ページ、3ページで1事業分というような形で作成をしております。左側、2ページにつきましては、この事業の基本的な当初計画ということで、これは当初から変わっていない内容になっておりまして、右側のほう、3ページのほうでございますけれども、上半分の取組実績、あるいは達成度、23年度分の実績が書いてございます。基本的には、評価委員会ではこの23年度分のものについて評価をお願いするものでございます。

そしてさらに、先ほど申し上げましたけれども、中段のところに24年度の主な目標と今後の取組というところが書いてございます。これにつきましては、先ほどご説明しましたように、最終年度ということもあわせて、24年

度何をやるのかというところもあわせて参考的に表示をさせていただいております。4年間の達成度見込みにつきましても、こちらのほうで表示をさせていただきます。これにつきましては、特に評価の対象ということではございませんけれども、いろいろ事業の進捗等で活用される局面があるかというふうに考えております。

それから、また資料戻っていただきまして、席上配付資料の2枚目でございます。として、評価要素におけるコストパフォーマンスの重視というふうに書いてございますけれども、これも昨年度の委員会等でご指摘をいただいている内容の一つといたしまして、取組状況を記載する上でコストパフォーマンスの視点でも記述できるように、先ほどの評価シートのほうに改良を加えてございます。

以上が主な変更点でございます。

あと、1つ抜けてしまいました。の上ですね。評価結果の表示方法を変更ということで、一番大事なところが抜けていました。これにつきましては、お手元の資料の3枚目をごらんください。

席上配付資料の3枚目の評価結果の表示方法(案)でございます。一番上の四角の左の昨年度というところが昨年度の評価の方法でございます。進捗度を「a・b・c・d」で評価をいただき、加点、減点の要素を矢印で評価をいただいで、最後に点数であらわすというようなことになっておりました。これでいきますと進捗度と加点、減点が点数に変わってしまうということで、ちょっとその辺の区分が不明確になってしまうということ、それと、進捗度というよりも、どちらかという点数に目がいってしまうということと、これで予定どおりいった場合が7点というようなことで考えておりますために、直感的にわかりにくいというようなこともございます。それを今年度、右側の表のように評価を変更していきたいというふうに考えてございます。

昨年度の点数方式から格付方式ということで、進捗度の「a・b・c・d」は基本的には同じ考え方でとらえまして、何らかの工夫を凝らした、あるいは効率的な手段をとったというような場合はそれに「+」を加える、その逆の場合は「-」にするというようなことで明示をしていき、格付方式ということで、よりわかりやすくしていきたいというふうに考えております。

それでは、1ページ戻っていただきます。以上が大きな変更点でございます。

次に、2番目のヒアリング対象事業の絞り込み、それから評価時期の前倒しについてでございますが、先ほど日程表で確認いただいたとおり、ヒアリング対象事業につきまして、今年度、とりあえず24事業を予定しております。これにつきましては基本的には委員会での議論を深めるために行うものでございますけれども、昨年比べて大分対象事業を絞り込ませていただいております。この辺につきましては、委員会のほうからのご指示、ご指摘等で増減をやるというふうになってございます。

それとあと、評価時期でございますけれども、昨年よりも約1か月ぐらい早く、第1回目を迎えているわけでございますが、より評価期間を短縮いたしま

して早目に、できるだけ早目にその結果を報告するという事で、翌年度への反映作業にうまくつながるであろうということから、期間の前倒しということで考えたものでございます。

それから、3のその他ということでございますけれども、昨年、その前と委員の皆様のご視察というものをした実績がございますので、今年度いかがいたしましょうかという部分も含めまして皆さんでご議論いただきたいということでございます。

以上、進め方、あるいは評価方法のたたき台ということでご説明をさせていただきました。よろしくお願いいたします。

廣瀬委員長

どうもありがとうございました。

かなりたくさんの方の点数の資料があるところを、ざっとかいつまんでご説明いただきましたので、いろいろと進め方についても、全体としてのスケジュール感という意味での進め方と、それから、個々の事業についての評価の方法の部分とございますけれども、まずは全体の流れにつきまして、何かご質問等がありましたら、そこから検討していきたいと思いますが、いかがでしょうか。

はい、どうぞ。

福崎委員

まず、この市民評価委員会の開催日程についてですが、去年よりも日程がタイトになっていると思うのですよ。全部で評価に使える回数が5回で、1回に取り扱う事業も昨年度より多いのではないかなと思うのです。

このタイトになった日程自体は、私はこれでもいいのかなと思うのですが、ただ、不十分になる議論、この後からきっと出てくると思うので、その日の会議のうちに話をしている、どうしてもスケジュールを先に進めるためにほかの項目について話をしなければいけないために、議論を先に進めましたとなったときに、この項目については議論が不十分だというものをマーキングしておくというか、後で、もし予備日に開催することになったときに、ここの項目については少し議論をしましょうと後でわかるようにしておくほうがいいと思います。

ほかにも、この日程についてタイトじゃないかなとか、1回のうちにこの事業数では多いのではないかなと、もし感じられている方がいたら聞きたいなと思ったのですが、いかがでしょうか。

廣瀬委員長

恐らく、今年初めての皆さんはなかなかこう、何本の事業があったらどれぐらいの感じになるかというのを、すぐにはおわかりにならない面もあるかなと思うのですが、継続の委員さん方、いかがでしょうか。まず、日程表をごらんになって。

井上総合政策監

参考までに申し上げますと、昨年度が実際の評価に使っていただいた回数としては6回ですから、今年は1回の減少ですね。それから、今、福崎委員から

ご指摘ありましたけれども、昨年度も、一応一通り流した上で、これはもう1回議論したい、ヒアリングしたいという事業について、フォローをする会議を1回挟んでいます。その後、取りまとめで2回議論をしていただいて、都合10回の開催をしております。

今回は、あらかじめ予備日という形で前倒しした表示で組んでありますけれども、そういう意味では実質1回分減っていますので、昨年ですと、1回当たりの開催で10数事業から20事業くらいの感じですか、1回当たりの評価していただく事業のところは、若干今回そういう意味では多少多くなっております。そこは予備日を、予備日じゃなくても委員会本番にしてしまうというような形も、委員の皆さんのご都合がよろしければできるかと思えます。

それから、先ほど1つご説明が漏れておりましたが、昨年、一昨年はプランの頭から順番に評価をしておりましたけれども、昨年も一昨年も、やはり行革のところの関係で、仕組みの議論ですので、なかなか難しいところと言いますか、制度論のほうの話になるとなかなか実感していただけないようなところがあったかと思えます。そこで、今年は初めに子育ての施策ですとか高齢者施策ですとか、実際の事業を先に評価していただいた上で、行革というような仕組みの議論を後半のほうに評価していただいたほうが、特に初めての委員の皆様方にはわかりやすいのかなということで、プランの途中の事業からスタートという形で組ませていただきました。

廣瀬委員長

どうもありがとうございます。

昨年度どれぐらいの回数が必要であったかということは、今ご紹介あったとおりですから、予備日とはいえ明確に日時も明記されということになっているのですが、恐らくこれをフルに使って均等に配置してしまうと、それでも足りなくなって全部行き着かないということもあるので、實際上、最大限これぐらいの日数を使って全部をこなしていくとすれば、出発点においてはこれぐらいの感じで若干の予備日を残して組み立てをした上で、実際に議論をしてみたら、やはり今日だけではこの事業については結論出ませんねと。例えば、こういう点も資料を出し直してもらって、改めて議論する必要がありますねというようなことが、議論をしていくと当然途中で出てきますので、そういう場合には、回数を増やしたいというわけではありませんが、全部をある意味ではちゃんと評価しきるためには、この予備日というのは、かなり高い確率で、全部埋まるかどうかは別として、予備日を全く使わないということではなくて、予備日まで含めて全体をしっかりと検討しましょうと、そういう予定だというようなことで今日の段階は理解をしておくというようなところかなと思えますけれども、そのような感じでいかがでしょうか。

(「はい」の声)

あと、順序が「3.子ども」というところから始まっているというのは、具体的な事業として展開しているものからまずは見ていった上で、仕組みの話とか条例の話とか、そういうことについては、少し具体論が目に見えるようにな

った段階で、そういうやや抽象的である話とか、そういうところへ話を持っていったほうが的確な評価の視点が得られるのではないかということでの提案ということですが、これはもうそういう順番で、特にご異議がなければそういうことで進めていくということにしたいと思いますが、そちらについてもよろしいでしょうか。

(「はい」の声)

それでは、これをどう具体的に評価をしていくかということなのですが、それにつきましては、例えば資料6の個票という形でまとめられています、1事業について見開き2ページで、左側は計画としてこのように立てたということであり、右側は、それがこれまでどのように実績を取り組まれてきたかという実績と、それから24年度、現年度ですけれども、今年についてはこのようなことを目的としていて、大体こういうところを取り組んでいきますということ。

これは23年度を評価するというのが委員会の主たる目的だけれども、冒頭からも出ておりますように、実質的には、ある意味では締めくくりの年ですから、全体としてこの計画が実行する年度としての最終年度に入っている段階で、どこまでのゴールが見えてきているかということも参照しながら今年の委員会の評価をしていこうと、そういうことを含めての評価の素材についての説明もあったということであります。

例えば、この読み取り方がありますとか、あるいは、もう一つは、先ほどお触れになりませんでしたけれども、もう一冊、別冊の参考資料という形で、これはフォーマットは各事業ごとにそれぞれの必要と思われることをまとめていただいているものですが、関連すると言いますか、具体的にどのようなふうに取り組まれていて、フォーマットに表現しきれないものについて、この別冊の参考資料がございます。この両方を参照しながら、それぞれの事業についてどう評価できるかということ、今後、順次120数項目についてやっていくということですが、これらの評価の観点の中身、それから、達成度について「a・b・c・d」それから「+」「-」をつけてというようなことで、評価の尺度ですね、こういったことについての説明がありました。

これらにつきまして、まずご質問等、こここのころのこれがどういう意味かとかですね、こういうことを事業については知りたいと思うのだけれども、それはどういう形でデータが得られるかと、そういうことを含めて、評価の具体的な方法につきまして、ご質問や、あるいはご要望等も含めてご指摘がありましたらお願いしたいと思います。

三浦委員

少し私、理解が及ばないのかもしれないのですが、格付方式で「a・b・c」のプラスマイナスの、これはどうやって全体の評価をつけるのかがよくわからないのですが、各人がつけたものをどうやって集約するのか、その方法が1つと、それから、内部評価を見ても思うのですが、「c」以下もプラスマイナスとある、すごく細かい評価、これは実質的に機能しないのではないかというか、これほど細かく下のほうの評価を使う場面が想定できないのですが、評価する

ほうも「c」に「+」をつけたり「-」をつけたりというのは何か迷いそうなのですけれども、その辺質問として発言します。

廣瀬委員長

ちなみに昨年について若干説明いたしますと、進捗度、この席上配付資料の3枚目ですね。評価結果の表示方法(案)とありますけれども、昨年度は進捗は目標を上回ったと考えれば「a」、予定どおり実施していると考えれば「b」、遅れてはいるけれども実現に向けて実施中であると考えれば「c」、大幅に遅れているとか、まだ着手できていないということであれば「d」という4段階を基本的に進捗度として評価をする。

ただ、その中でも、予定どおりとはいえ、予定より若干は上回りながら来ているねという、やや加点できるようなものがあれば、一応予定どおりとは言えるけれども、ちょっと物足りないところがあるねと、減点要素ありですねということであれば、そういうことを表現したいということもありまして、全部について加点、減点があるかというのと、「a」については、目標を上回っているということに対して、さらにそこから減点するというのは、そのときの設計の発想では余りないだろうということで、「a」については加点するかそのまま、「b・c・d」については加点、減点ありの形で10段階の点数をつけました。

評価においては、各自が評価をして持ち寄るわけですがけれども、そこで議論をした上で、その持ち寄った仮の評価を修正する必要があるれば、そこで修正、確定をしていただいて、それでも全員が完全に一致するということはありませんで、若干のばらつきが出ます。その中で、「a・b・c・d」については、最も数が多かったものに進捗度についての評価を確定した上で、点数については、点数が例えば「bの7点」の人が多かったとしても、8点の人が若干、6点の人、それから5点の人、4点の人、4点の人も少しづついるということであれば、その分布の平均をとって点数としては何点、進捗は「b」だけれども6.5点でしたとか、そういうような形の評価をしました。

それを、今年のこの提案で言うと、その二通り、進捗度「b」で点数「6.5点」ということではなくて、いや、これは全体として「b」なのか「b-」なのかということを確認しようという提案かなと思って伺ったのですが、去年までのことを考えると、「a・b・c・d」の集約はしたけれど、点については個々の委員間の評価のばらつきについては平均化するというので集約をしました。プラスマイナスで言うと平均ということではできないではないかというご趣旨かと思えますけれども、事務局からは、この変更の趣旨については、どういうことを目指してというか、どういうことを意図してやったか補足いただければと思います。

井上総合政策監

まず、趣旨について、先ほど中野のほうからご説明いたしましたけれども、考え方としては、基本的には進捗度プラス加減要素ということに関しては、実は昨年と変えていないとご理解いただければと思います。

その加減要素につきましても、昨年度も実際、報告書には明記しておりますけれども、進捗に対して何かの工夫を凝らしたり、あるいは効率的な手法で取り組んだという場合には加点する。そうでない場合は、それにもっと工夫の余地があるだろうという場合には減点するという意味で、進捗という量的なものをそういうふうに4段階で評価した上で、そういう質的な面のところのプラスマイナスを評価するという形で、評価基準は昨年度も一昨年度も同じ形であります。

ただ、実際に評価をしていただく際に、我々の内部評価もそういう面があったのですけれども、最後に点数化してしまっていますので、進捗度は「c」なのだけれども、進捗の度合がそれほど、少しだけ遅れているくらいだからプラス1点しようとか、進捗度は目標より上回っているんだけれども、上回り方が多少それほどでもないからどうしようかとかという、端的に申しますと「c+」というのと「b-」というのが本当に1点の差で連続しているかということ、そうでないものを、わかりやすさということで点数表記してしまった故に、加減要素のところの量的な面が入り込んでいるのではないかというのが、2年間やってみたところでの我々の反省点です。内部評価も含めてですけれども、進捗度プラス加減要素のところは、質的な工夫があったかなかったかということであれば、それをその後で、無理してと言うとあれですけれども、点数化しなくても、進捗度にプラスがあったかマイナスがあったかという表記にしたほうが、もともとの評価軸を素直にあらわしているのではないかというのが、今回の変更の根本の発想です。

また、直感的には標準が「bの7点」というのがわかりにくいというような声もありましたし、そういう進捗度と質の2つの評価軸があるのに、最後、点数で一本化されてしまっていますので、その辺の説明に苦慮したということもありまして、進捗度にプラス、個別の質的な工夫があったかなかったかというのをそのままストレートにあらわす表記方法が、評価軸をそのまま表記した形になるのではないかと考えております。

それが1点と、それから、委員会としての評価の出し方のところの話であります。基本的には、「a・b・c・d」につきましては去年と同じような形で出した上で、残りについて、その質的な評価でプラスマイナスがあったのかなかったのかということにつきましても、それぞれ符号の数が出てきますので、それはその質的な面で、まあ言い方ですけれども、「b+」の場合と「c+」という評価があった場合は、それぞれ質的な面で工夫があったと評価していただいた方は、進捗度は「b」に置くか「c」に置くかにかかわらず「+」をつけていただいているということですし、もっと工夫ができるはずだということであれば、そのところに「-」をつけていただいているようになるかと思っておりますので、その加減要素のところが一番多かったものを組み合わせると、進捗度は進捗度で4段階の中で一番多かったもので「a・b・c・d」が委員会として固まる。加減要素も、その加減要素のありやなしやということで、「+」をつけた方が多かったのか、あるいは「-」をつけた方が多かったのかという

ことで、その符号が固まるという形にすればいいのではないかと考えております。

ここから先は、報告書のまとめ方のご提案で、少し先走りになりますけれども、委員の皆様の評価には当然ばらつきがあり、それを平均をとるという形で報告書をまとめましたので、委員会の資料の中では、そのばらつきが資料上委員の皆様方や事務局の我々はわかっていましたけれども、最後、報告書になるときはそれが全部飛んでしまって平均点だけ出ておりました。今年は、最終段階で報告書をつくる時に、そういうばらつきもわかるような報告書のつくり方をするによって、ある意味、昨年までは、報告書の中で見えていなかった、点数化することによって切り捨てられた部分も、皆さんが実際にどういう点をつけられたか、委員の皆さんの固有名詞を入れるかどうかは別ですけども、例えば「b - 」をつけた方が何人いらっしゃいました、「c + 」をつけた方が何人いらっしゃいましたと。全体としては、委員会の評価としては「b + 」になりましたとか「c - 」になりましたと。そういうところまで報告書の中につくり込んでいくことができるのではないかなと考えております。

廣瀬委員長

今、説明がありましたけれども、いかがでしょう。

伊藤委員

今までやっていた物の見方と違う格好での点数をつけるという格好ですけども、点数というか、「a + 」とか「a - 」とかつけるやり方ですけども、これは事を進んでいる進捗状況に合わせて、こころろ変えるという、そういう発想、そのほうが何か少し違うのではないかなという気がします。

行政のほうで達成度の関係をこういう「a + 」とか「a - 」とかという表示をするのであれば、それは行政としてのランク付け、それはこうですよという見方のほうがわかりやすいと思うのですね。今までやっていた人たちは10点法でこういう格好でやって、そのわきに空欄をつくって、行政として見た場合は、この人はこういう評価しているけれども「a + 」だとか「a - 」だとか、そういう表示した上で独自のその見方をすべきじゃないかなという気がします。

それから、道半ばにして、ルールじゃないですけども、読み方を変えたり書き方を変えたりするのが果たして妥当かどうか、という問題を私は感じます。

福崎委員

私は、この「a・b・c・d」の「+」「-」と変わったときに、よりわかりやすくなっていいのではないかなって、逆に好意的に見ました。ただ、今、伊藤委員が指摘されたとおり、昨年度比較という点で去年と比べたときに、やっぱり数字の点数がないと、どう変わっているのかを見比べられません。その点はたしかに経年、4年間通して評価をしたという実績面としては不十分な結果になってしまうのではないかなと思いました。

井上総合政策監

すみません、少しご説明が足りませんでした。

これまでも今年も、要は考え方としては、基本的に進捗度プラス加減要素という意味では同じでして、最後それを編集して点数という連続性を持たせた形で表記するかしらないかというところの話でありますので、昨年度皆様方に評価していただいたことは、今年やろうとしている表記に置きかえができるわけです。

ですから、表記方法を今年こういうふうに変えたときに、去年あるいは一昨年の評価していただいたものが、今年の方法で表記するとどうなるかということで置き換えができますので、そういう意味では昨年あるいは一昨年と連続性のある、例えば点数表記したものではなくて、「b +」だった項目が一昨年は何項目ありました、去年は何項目ありました、今年はずっと減ったのか増えたのかということであったり、あるいは同じ事業について、一昨年は「b -」でした、去年は「b」でした、今年は「b +」でした、あるいは「c -」でしたというような比較も、そういう意味での評価軸を変えているということではなくて、評価の最後の表記だけを変えたということなので、比較可能と理解しております。

たしかに今回の変更にあたって、伊藤委員がおっしゃられたようなことはやはり我々も気になってかなり議論をしたのですが、そこは最終の表記を変えるのであって、評価の考え方自体を変えるということではないのではないかと考えて、こういうご提案をさせていただいたということでございます。

木島委員

今、井上さんが言われたことというのが、結局、表記は変わって、「a -」の扱いは別ですけども、数字に置き換えて読むことができるということではないのですか。

井上総合政策監

そうですね。数字に置き換えて読むこともできるし、数字を符号に置き換えて読むこともできるということです。

三浦委員

もう少し具体的にお尋ねしたいんですけども、例えば14人の委員が、「b」とした人が7人、「b -」とした人が7人という場合はどういう判断がなされるべきなのでしょう。

井上総合政策監

同数となれば、去年も「b」と「c」で同数というパターンがあったと思います。そのときには委員長に決していただいたというようなこともありましたので、今年も同じかと。

三浦委員

では、もう1点。「b」が10人で、「b +」が2人で「b -」が2人だったら「b」になるということではないのですか。

井上総合政策監

そういうことになります。

廣瀬委員長

恐らく事務局からのご提案の趣旨は、やはり「b」の減点である6点と「c」の加点である5点との差というのは1点差になっているのだけれども、「b」の中のプラスマイナスの差と、あるいは「c」の中のプラスマイナスの差と同じ質の差なのだろうか、違うのではないだろうかという考え方で、これはその性質的にやっぱり、大きく分けて、遅れているのか順調なのか、もっと頑張っているのかというところの差は明確にした上で、その中でも若干の質的な加減要素を入れているのだということをやより明確に示したい。

均等に分布している連続の中のこの辺というふうに、特に平均をとってですね、5点の人も6点の人も7点の人もいる中で平均をとるということは、本当に均等な尺度の上でのこの辺に平均点が来ましたという経過になってしまっていましたから、それを今年は改善したいという提案かなと受けとめましたが、他方で、昨年までの評価結果と、今年仮に変えたとしたら、変えて出していく評価結果を並べたときに、つまり去年よりも取組が進んだのか、それともどうなのかというようなことについて、うまく比べられるかどうかというのが伊藤委員のご指摘になったところで、これはもう連続してやっていくわけですから、それができないと、ある意味ではせっかく続けて同じ計画をずっとフォローしてきた意味というのがある程度失われてしまいますから。

事務局としては、いや、基本的な考え方は共通しているから、例えば去年までの分についても、平均というよりは、「b」の加点した人が何人、「b」の減点した人が何人、「c」の加点が何人というような観点で評価結果を見ていけば、同じ土俵の上でほぼ比較できるのではないかという趣旨かと思います。

これらを踏まえまして、いかがでしょうか。

福崎委員

すみません、私も、少し話が戻ってしまいますが、木島委員がおっしゃった「a - 」というのが少し気になります。点数の読み替えをするというのを前提に新しい表記方法を使うとなると、やはり昨年がない、8.5点とかのない、「a - 」というのはあらかじめ除いておいたほうが統一性があるのではないかと思ったのですが、いかがでしょうか。

単純に「+」「-」をつけるだけなら、私も本当にこの「a・b・c・d」と、何か好意的に見られる点があったら「+」をつけて、やはりここが気になるというところは「-」をつけてという表記については、とてもわかりやすくいいと思うんですけども、統一性というものを考えたら「a - 」の扱いがどうなるかなと思います。

井上総合政策監

今のご議論は、おっしゃることはよくわかるのですが、点数に置き換えてそれをすると、おっしゃるような問題が出てくるのですけれども、そういうこともあって、点数ではなくて符号のほうに置き換えようとしているわけですので、符号に置き換えた結果として、一昨年あるいは昨年は、その「a - 」に当たるところが空集合になるけれども今回は新たに出てくるということかと考えております。点数化すると、今おっしゃられたように、8.5点みたいなものを

置かなければならなくなるので、少し変なことになりますけれども。

もともと、昨年、一昨年と、初めに委員長のほうから補足していただきましたように、「a - 」はないであろうということで点数を振ったのですから、その進捗度、それから加減要素というのを別の概念だと考えれば、当然進捗は進んでいるのだけれども、もっと工夫しなければいけないねという面、カテゴリーがあるはずなので、比較の対象であれば出てくる形にはなりますけれども、言い方はあれですけれども、致命的と言うと言い方はあれですけれども、置き換えたときに、昨年、一昨年はそういうものはないであろうといった前提で評価していました。今回はそこに評価軸を明確にした関係でそういうカテゴリーが新たに出てきましたということで、表をつくった結果として、一昨年、昨年は「a - 」に当たるところは空になって、そこに当たるものはなかったということになるかと思います。

それはそれでそういうふうに、そういう面からはここに当たるものはないという前提で評価していったということに関しては報告書なりできちんとわかるようにしなければいけないと思いますけれども、そういう処理で対応できるのではないかというふうに考えております。

木島委員

先ほど三浦さんのご提示いただいたものは、もしテクニカル的に解決するとすれば、それを数字に置き換えるなどして、それで平均をとって、「7点」だったら「b」にするとか、6.幾つだったら「b - 」にするとか、そのような方法は正直とれるのかなとか思っています。けれども、すみません、少しご質問の趣旨と変わってしまうかもしれないのですが、そもそも井上さんのほうからありましたように、最後、報告会のときに、市民の方が、どちらの表記が一番わかりやすいのかというところを決めて、最後に集計方法みたいなものを決めたほうがいいのかと、今のお話を伺っているから思ったのですが。

廣瀬委員長

そうすると、今日は手元にはないですよ。昨年の報告書は。

井上総合政策監

準備していますので、今お配りいたします。

廣瀬委員長

どのようにこの報告を、ここの委員会の市民評価の結果をどういう形で表現して市民の皆さんに報告をするかということですので。

井上総合政策監

報告書をお配りさせていただいておりますが、昨年の報告書の5ページをごらんいただくと、全体の評価結果という単年度評価がございます。ここは点数が進捗のとおりですので「a・b・c・d」という状況になっております。棒グラフの中に点を入れていきますけれども、報告書はこの点を抜いた形のものになっています。

それから、2ページおめくりいただきまして8ページになりますが、この進捗度に関しての前年度比較というのが、21、22年度のもの。これは23年

度も当然出てくるかと思えますけれども、こういうような形のところがある意味で報告書の中ではメインになるというふうに考えております。

ただ、これは4段階だけの部分でありますので、これをもう一段階細かいものとして、この中で「a・b・c・d」の中での「+」「-」がどういうふうになっているか、全体として、「+」がついた項目が何項目で、「-」がついたのが何項目あるというようなことに関しても、そこだけ抜き出して、そういう質的な評価軸について、一昨年あるいは昨年と比べて今年度はというふうな報告書の表記ができるかと思えますし、それは、今これは全体の話でなっておりますけれども、9ページ以降のところにありますように、分野別でまた進捗度がどういうふうに進んでいたか、あるいは加点、減点での質的な要素のところはどういうふうになっていたかというふうなことも追っていけるかと思えます。

一番、ある意味で、138という項目が、本当にやると言ったのをやったのかどうかという一番コアな部分に関しては、こういう形の円グラフなり棒グラフの経年変化のところでも市民の皆さんに皆様方の評価結果をご報告して、ご説明させていただくということができないのではないかなというふうに考えております。

廣瀬委員長

よろしいでしょうか。

三浦委員

私は、最初質問させていただいた段階よりは、ご提案の意味がわかってきたのですけれども、大きくは「a・b・c・d」の4つにまず評価軸を定めておいて、「b」の中で工夫があるかないか、ある場合は「+」で、もう少し工夫すべきだと思ったときは「-」とやっていけばいいというので頭の整理はついたのでありますが、一方で、先ほどのご説明で、個々の委員がプラス評価をしたかマイナス評価をしたかというのは、そういう評価も重要性が増すと。

点数方式のときは飛び値を消したりしていましたが、それでも、「c+」が何人いた、「b+」が何人いたというふうに離れていようが、そういう評価が委員から出されていて、だれが何をつけたというのは除いておいても、そういう評価があったということが意味を持ってきそうな気がします。もしこの方法を採用するとすれば、毎回の委員会の集約表のフォーマットも少し変えて、いつもは個々の委員の点数が並んでいて、飛び値を切って、足して平均でということをつけていましたけれども、その場合の修正の具合で、「c+」が何人で「b」が何人というように、その数字も確認し、それが報告書にちゃんと出るようにというふうにしていかないと、その委員会の場で最終的な評価が、どういうふうに合意したかというのが、どういう評価を下したかというのがわかりにくいと思えます。委員会での議論結果の評価が「b+」や「c-」だけになってしまうと、少し確認しづらい部分があると思うので、もしこの評価方法でいくなら、その辺の毎回の評価シートのつくり方も工夫をしていただきたいと思います。

あともう一つつけ加えると、少し長くなって恐縮ですが、その上で、やはり今まで議論があったように、昨年度まで2年間やってきた評価と比較が、点数比較をしていた部分もあったわけなので、点数が上がるかという議論していた部分があったかと思うので、そこはシンプルに、「b」が「c」となったとか「c」が「b」となったかというところだけを見るという判断でいいのですかね。

井上総合政策監

「b」、「c」という進捗度のところと、それから、当然加減要素のところもですね、質的な部分のところも、今までの昨年、一昨年についても加減要素として、加点をした人が多かったとか減点をした人が多かったとかということは出てきますので、その加減要素に関して、今までよりも加点「+」をつけた人が増えたとか、あるいは減ったというようなことも各分野ごとに比較することは当然できますので、それも重要な評価、評価していただいた一つの結果ですので、そういうものを、どこまで報告書をまとめるかというときにその情報を出すかというのはありますけれども、当然そういうところが今まで評価していただいたものが全部消えてしまうという話ではなくて、今、中でしか評価をしていないということもありますので、そういう加点、減点の話も当然、加点の要素が増えた、あるいは減点の要素が増えた、あるいは減点が減ったとかいうような評価結果の比較ですね、前々年度から前年度への比較というのも当然していく形になるかと思えます。

三浦委員

ということは、今年の評価方法、この評価方法を採用した場合、今年の評価を点数に戻すのではなくて、過去の評価のほうをプラスマイナスに読み直す作業を想定されているということですか。

井上総合政策監

おっしゃるとおりです。それはそうなりますのは、先ほど言われましたように、今まで「a - 」というのを使ってなかった過去がありますので、今年の話の点数に持っていくよりは、去年、一昨年の点数を符号に振り替えた形で前年度比較をできるような形にするということを考えております。

三浦委員

はい、わかりました。

福崎委員

先ほど三浦さんが指摘されていた点に続くのですが、私も、井上さんのほうから今回の評価はばらつきを見れるように表示をするとご説明があったときに、今回の委員会というのは合意形成をしないのかなと思ったのです。昨年は、委員会としては「6点」、「6.5点」とか平均値をとって、これで合意しましょうねということで一つ数字を出しました。各担当部局が出していた点数と比較をして、「0.3点」の差があるのだけれども、これがすごく大事だよという話し合いを最終的にしていたと思うのですが、今回は出していたいただいた内部評価のほうを見ても「a・b・c・d」という大きな評価のほう

しか載っていないくて、私たちがもし合意形成において「b」判定だけをするのだとしたら、差がかなりつかなくなると思うのです。その点についてはいかがでしょうか。

内部評価と外部評価、私たち委員会の評価を比較するという、うまく何かこう、差をつけることを重要視するわけではないのですけれども、でも、余り差が見えなくなるというのも問題かと思ひまして。

井上総合政策監

どちらかという内部評価のつけ方として、去年も一緒でしたけれども、内部評価も外部評価も同じ評価軸なのですけれども、内部評価はえてしてやはり加点、減点をつけない場合が多いのですね。

ですから、去年も内部評価は「bの7点」とか「cの4点」とかというのが多くて、どちらかという、そこにもう少し工夫の余地があるよねという評価をいただいて点が下がったというパターンが多いわけですし、そこは今年も基本的に同じやり方をとりますが、先ほどご提案申し上げたような形の取扱いにしますと、「-」をつけた人が過半数を超えないと委員会の評価が「-」にならないのですね。

そういう意味で、去年みたいな「0.1点」刻みの差は報告書から少し飛んでしまうこともありますので、先ほど申し上げたように、委員の皆様の名前はともかくとして、何を付けた方が多かったかというのを報告書の後ろの載せたほうがいいのではないかと考えています。その飛んでしまう部分に関しては、「-」をつけた人は過半数おられなかったのが全体としては「-」がつかなかったけれども、皆さんが本当に「b」のスタンダードだったのか、それとも「b」のスタンダードと「b-」と評価が分かれた結果として「b」のスタンダードなのかというところを、報告書の中でわかるようにしたいと。

昨年はそこが最終の点数の中に溶け込んで見えるといった形でしたが、今回はばらつきも含めてわかるように報告書をつくってはどうかとご提案申し上げたのは、今まさに福崎委員からご指摘いただいたところを報告書の中に残すために、そういうのが必要ではないかと考えたためでございます。

廣瀬委員長

恐らく去年の方式ですと平均される中に算入されるから、あえて言えば、明らかに評価違っていたなと自分で思わない限りは、とりあえず自分で評価してきた点数を基本的には維持することは多かったですし、ただ、他の方は違う点数つけられたわけでごさいます、それとの合意について言うと、つまり数学的な平均になっていくことを通して、質的な評価をそれぞれ変えるべきかどうかということは余り問い詰めずに、数字上統合できてしまうから、それで話し合いというか、ここでの検討はもうそれで止めても差し支えないのかなという雰囲気でも評価できていたかと思うのですね。

今回について言うと、むしろ数字の上での単純な平均ということはなかなか、ということができなくなりますから、では、質的にどっちだろうねということについては、むしろ検討の上で合意によって、それならやはりこれですかねと

ということが出るのであれば、むしろ話し合いによって集約していくことにもなるだろうし、あるいは、もう少し、平均が何点、同じ「6.5点」にしても、すぐばらついて平均が「6.5点」なのか、「6点」と「7点」が半数ずつだったから「6.5点」なのかという違いも含めて分布で表記をしていけば、それが明確に個票には表現できることになるので、ある意味で言うと、去年までよりももう少し評価のばらつきの度合いなり、質的なところは細かくそのまま記録表現がされるようになるということでもあると。

これは実際に評価をしてきて、持ち寄って議論してみて、合意はこういう考え方だったらできるものだなというふうの流れでいくのか、いや、案外難しく、分布で表現しましょうねということに全体としてなっていくか、これはやってみないとわからないかなと正直思います。

井上総合政策監

昨年、一昨年は離れ値の話がありましたので、それはそういう平均をとるという関係上そういう方式になったということもありますけれども、初めのほうに委員長のごあいさつにもありましたように、皆様方、当然いろいろなバックボーンがあってお集まりいただいていますので、やはりいろいろな見方によって評価が違う部分というのは当然出てくるかと思しますので、なるべくならそういうのは、厳しく評価する人もいれば、高く評価する人もいたということがきちんと報告書の中に出ていく形のほうが、皆様にせっかく評価していただくわけですので、そのほうがいいのではないかと我々としては考えております。

廣瀬委員長

それでは、継続性の問題はありますけれども、基本的な考え方として、「a・b・c・d」の4段階に加減要素を考えるとということによって継続していて、去年までのものについても、方式を変えるとすれば、その方式にほぼ置き換えた、表現を変えた形で比較可能な、過去との対照もできるということもありますので、基本的にはこの方式で実際やってみると、実は「a-」が一つもつかないということもあるかもしれませんが、ご提案の方式でスタートするというのでいかがでしょうか。

(「異議なし」との声あり)

それでは、既に予定の時刻も回ってきましたが、今後の進め方について、その他の論点について、何かご意見、ご指摘事項がありましたらお願いしたいと思えます。

須藤委員

ヒアリング対象の絞り込み、事務局案をベースに追加・削除した上で書いてございますね。それで、130何項目の今回の事業の中で、これを一つ一つ子細に見ると、非常に重要なもの、市として、あるいは非常に難易度の高いものと、それから、比較的難易度が低いと。その137項目の中身についてですが、かなり差があると思うのですね。ですから、多分、事務局案もそういうふ

うな形でヒアリング対象項目は絞ってこられたと思いますけれども、本市にとって重要で、かつ非常に影響力が大きいと、我々市民に対しても。そういったものについて、ぜひこの中にきちっと入れてほしい。

それから、非常に難易度の高いもの、しかし、これをやるということは非常に長期的に見て大事なのだといったものについて、きちっとヒアリングをさせてもらいたい。途中で終わる可能性もあるけれども、非常にやはり4年間ではとても無理だと、しかし、これをやっておかないと将来に禍根を残すよと、そういった事業が必ずあると思うのですね。ですから、事業の中の重さですね、それらをよくきちっと反映をさせた上で、ぜひそういった重要なものについて我々がきちっとヒアリングをできるような形でご配慮を賜りたいというふうに思います。よろしくお願いします。

廣瀬委員長

昨年も、一応事務局案として、こういうことをヒアリングするのがいいのではないかという提案はいただきましたが、委員会の中で、いや、この項目をぜひ取り上げたい、ヒアリングをしたいということを出していただいて、調整しながら適宜入れ替えもしながら運用いたしましたので、今年もそれはそういう方式でということの提案かと思っておりますし、初回については、あらかじめ段取りをしておかないとスタートできないので、次回の部分についても検討してみて、評価をこれから宿題をこなしていくわけですが、次回までの間に、ヒアリングなしの予定になっていたけれども、この資料を読み込んだところ、やはりこれは次回で結論を出すのではなくて、3回目以降にヒアリングをやった上で結論を出さないと無理ですねと思われるような場合がありましたら、それを次回持ってきていただいて、それもこの場で検討して、そうだという合意がとればそのようにやっていくというようなことは可能かと思っておりますので。

須藤委員

はい、了解しました。

井上総合政策監

実は今回も次回のヒアリング対象の候補を選ばせていただいております。今回、次回のこのシートを2枚、資料7-2と7-3でお配りさせていただいておりますが、7-2のシートは評価のほうのシートでありまして、7-3のシートが、今須藤委員からご指摘ありましたように、実質評価の1回目として、次回、3事業をヒアリング対象とした案としておりますけれども、ぜひこれをヒアリングしたいという話があればということで、多分おしかりを受けるかと思うんですが、今週、25日までという非常にタイトなスケジュールでありますけれども、事務局案のほうは要らないから、こっちをやってくれというようなご意見を、委員の皆さんからいただくためのシートでございます。

今回そういう形で同じタイミングでお配りしているので期間が短いですが、通常はこの次回のヒアリング対象の資料をその前の回るときに配るようにいたしますので、委員の皆さんからのご意見を踏まえて決めたいと思えますし、評価と違いまして、数のほうは、過半数の方がこれを追加すべきという

話にはあまりならないのですけれども、ただ、お1人でもお2人でも、これをやったほうがいいのではないかというご意見があって、そういったものは、時間の兼ね合いの中で、そういうことであればということで昨年も追加させていただいておりますので、このシートの中でご意見をいただければと思います。

福崎委員

須藤委員がご指摘されたことの中で、すごく重要だなと思った点がありました。昨年のヒアリングでいらしてくださった方が、ご説明される際に、ある程度資料に書いてあること、私たちの手元に既にある資料を読み上げる方が結構多かったように思います。

もし可能だったら、こういうことを話してもらいたいということを整理するというか、特に、須藤委員がおっしゃった、この事業は長期的に見て重要なのだという、そういう事業のPRというか、こういった視点で、これはどうしても必要なんだということを、職員の方から、担当部局の方から聞きたいと思うので、ぜひその辺について話していただければなと思います。PR、アピールというのは少しおかしいかもしれないんですけども、市民が聞きたい声でもあると思います。

井上総合政策監

昨年はたしかに資料説明に時間をかなり要したという嫌いがあったかと思います。ご指摘のとおりだと思いますので、皆さんは資料に関しては事前にお読みいただいているという前提で、ポイントを絞って、なおかつそういう担当としての思いを説明するように、庁内でも徹底したいと思います。

木島委員

今の話とつながるかなと思うのですけれども、今回入れていただいたコストパフォーマンスと効率化のところなのですけれども、たまたま今開かせていただいた個票のほうの3ページのほうに書いてあるのを見ると、効率化、コストパフォーマンスと書いていただいているのですけれども、文言で表記されており、数値でこれだけコスト削減しましたとか、そういう表記では基本的にはされていないところが多いのでしょうか。

井上総合政策監

今回のところではないかもしれませんが。シートをつくっている時点で間に合わなかった部分もあるかと思いますが、参考資料や追加資料のところでもう少し補足できるものがあるかと思いますが、次回以降の分野については改めてチェックしたいと思います。

木島委員

ありがとうございます。

実際に、先ほど福崎さんも言われたように、ヒアリングしている中で、どのくらい削減されたかということがヒアリングできるとか、そういうことがあればいいなと思います。

あと、すみません、もう一つ、事業費について、昨年もあったかと思うのですが、この事業費の意味合いは統一されているのかなというところです。イニ

シャルコストとランニングコストが全部混ざっている、わかりづらかったようなところもあったと思います。今年の事業費というのはどういう意味合いでしょうか。

井上総合政策監

基本的には、それに要する事業費ということで記載しておりますけれども、ご指摘のような分野、例えば今回ですと30ページ、31ページの保育所のところで、保育所の整備というイニシャルコストと、それから整備をして運営段階に移ると定員が増えた分膨らんでいく運営コストと、たしか去年は運営費だけを書いていたのではなかったかと思っておりますけれども、こういうことに関しては運営費と整備費を両方記載させていただいていると思っております。

ただ、まだ記載が抜けているものもあって、ご質問をいただいて追加することもあるかと思っておりますので、その辺はご指摘をいただければと思います。

木島委員

参考資料なのですが、これをデータでもらうことというのは可能ですか。

事務局職員

PDFの形にしましてお送りしたいと思います。

廣瀬委員長

それでは、もう既に次回までに向けてどういうことをお願いし、作業をお願いするかということの話にも入っておりますが、おおむね今説明があり議論したようなことで、表現の方法については「a・b・c・d」の「+」「-」を含めてという形にするということ、それから、説明、各進捗状況の資料については、本日の資料6や参考資料等を見ていただきながら、資料の7-2のほうの評価、それから、7-3のほうはヒアリング候補について、これをヒアリングに加えるべきだとか、提案にはあったけれども、これはヒアリングするまでもなく、別のことに時間を使ったほうがいいのかということについては今週金曜までという設定になっております。

次回までには、まず、今週中にこのヒアリング候補についてのご要望を出していただく、それから、29日までということでも事前評価の、この右のほうの空欄になっているところを記入をしていただけて出していただくということになるかと思っておりますが、これを出していただいて、それを一たん集約をしたものを手元に置きながら、次回の委員会でヒアリング対象項目からまず始めて、それから、ヒアリング対象外の各事業について、出てきた評価結果を突き合わせながら、議論すべき論点があったら、それを議論しながら最終的なこの委員会としての評価結果を確定すると、そういう作業を今後順次進めていくということになります。

この進め方と言いますか、作業内容等につきまして、何かご疑問の点とか、このようにしてほしい、今、データをPDFで欲しいというご要望がありましたけれども、そういうことを含めて、ございましたら出しておいていただきたい

いと思いますが。

7 - 2、そして7 - 3については、これはご都合のいいほうで、紙でファクス等を出していただいても構わないし、それから、エクセルの表でいただいて、それを電子メール等で返信するということでも可能ということで昨年もやっておりますので、今年度もその方式ということでもよろしいでしょうか。

(「はい」の声)

では、もう時間がなくなっておりますけれども、こういうような形で次回以降進めていくということでもよろしいでしょうか。

(「はい」の声)

6 その他

廣瀬委員長

それから、先ほど既にそうした話がありましたが、委員会として、この事業にかかわる現場を視察するという機会を初年度、2年度ともに持たせていただきましたけれども、今日はもう時間切れでもありますので、基本的には、やはり現場を見る機会というのは持ったほうが実感を持って評価できるかと思えますので、それについては少しアレンジを事務局のほうにさせていただいて、こういう形で今年ではできるのではないかということの提案を受けた上で、いつごろ、どういうふうな形式でどこへ行くかということを確認すると、そういう方針で進めるということでもよろしいでしょうか。

(「はい」の声)

それでは、そのほか、この委員会につきまして、今後の進め方等についてご要望がございましたら伺っておきたいと思いますが。

福崎委員

すみません、簡単になのですけれども、目標設定についてなんですが、数値目標、つまり一番最初に、当初目標で立てられたこの目標というのが、平成22年度に入ってから立てられたものだと思うんですけれども、その設定にかけた期間というのはどれくらいだったのですか。

井上総合政策監

このしあわせ倍増プランのベースになっているのは、今の清水市長が選挙の際に提示したマニフェストでありますので、市長選が21年の5月で、その時点で数字も入って目標があったものもありますし、その時点では項目だけが書かれていて、具体の数値目標が入ってなかった項目もあります。

清水市長が当選後、倍増プランができたのは21年11月ですので、市としての議論は実質半年弱で、集中的に議論を行ったのは8月、9月ぐらいだった

かと思えます。市長のマニフェストをもとに庁内で検討をして、都市経営戦略会議で議論して、修正を行ってつくったということです。基本的には、平成20年度の実績値をベースにして、21年から24年まででどうしていくかという目標の設定の仕方をしております。

福崎委員

ありがとうございます。

7 閉会

廣瀬委員長

では、ほかに何かありますでしょうか。

予定された議事については以上でございます。

次回は6月の1日、金曜日の、今日より30分早い19時に、こちらのこの場所というふうに聞いております。

では、以上をもちまして第1回の評価委員会を閉会させていただきます。

どうもお疲れさまでした。